

きっかけをつなぐ旅によう「パスポート」

PASSPORT.

与川内ホテル村保存会特集

Lightning bug Preservation society

vol.62
FREE PAPER
地域の出来事に触れる
ソーシャルマガジン

地域を照らす 希望の光

Light of hope.

とくしま市活セ㇯ㇰ-



Editor's note 編集後記

この幸せな光を、ずっとみていたいと思う旅でした。

この美しい景色を、誰が守ってきたのか。知られざる人の活躍を伝えたいと思ったのが取材をするに至った経緯でした。お世話になった地域の方々が本当に素敵で、「またあの人おらんかな～」なんて、いつの間にかホテルを見ること以外の目的もできていました。私が取材を通して見た人のあたたかさ、そして与川内という集落の在り方が伝わってほしいです。どうかこれからもずっと、この光が灯り続けますように。

ー 長谷川 (構成/写真)

取材一回目は地域の方々のあたたかい想いに触れ、二回目は見たことの無い数のホテルの美しさに驚き、三回目はお祭り当日。毎年恒例のホテルを見に来たお客さんの笑顔に癒やされました。与川内のホテルは、人と人が繋がり合うことできらめく、とても幸せな光です。ずっと見ていたかったけど、あっという間に終わってしまった、楽しい空間でした。また来年も再来年も、その先も、与川内の人々とホテルに会いにいきたい！

ー 神倉 (デザイン)

NEXT ISSUE 次回予告 2017年9月配布予定。次回の旅も是非お楽しみ下さい。

とくしま市活セ㇯ㇰ- TOKUSHIMA NPO CENTER

発行月 2017年6月
号数 62号
発行 徳島市市民活力開発センター
〒770-0847 徳島県徳島市幸町3丁目71-1 幸町会館1階
[TEL] 088-611-3886
[FAX] 088-624-3860
[mail] nposhimin@fm.nmt.ne.jp
[WEB] www.tokushima-shikatsu.com

事務所看板の前にて、神倉↓



事務所看板の前にて、神倉↓

ABOUT PASSPORT.

“PASSPORT.”それは皆さんを特別な旅へとお連れするチケット。行きゆく先に広がるのは、団体の活動や人の想いに溢れた景色。見て、感じて、もっと知りたくなる。そんなきっかけをつなぐソーシャルマガジン。本誌を手にした皆様に、どうか素敵な出会いがありますように。

See you next time. 自転車

この広報誌に関するご意見、ご感想は発行元である徳島市市民活力開発センター(088-611-3886)までご連絡下さい。

旅の始まり 「地域の在り方」

それは、地域の結束がもたらした光

与川内ホタル村保存会とは？

初夏の夜空に舞い、人々の心に癒しをもたらしてきたホタル達。勝浦町与川内地区では河川の工事や地域環境の変化とともに、その光が失われつつあった。”彼らを昔のようにたくさん飛ばせたい”そう願った地域の人々が集まり、2002年6月13日に与川内ホタル村保存会を結成。河川清掃やホタルに関する研究・保存活動、ホタルまっりの開催等に取り組む。

〔お問合せ〕 TEL: 090-7143-1427
URL: blog.goo.ne.jp/y-hotarumura

心奪われる

そんな景色に、あなたは
出会ったことがあるだろうか？

眼前を飛び交う無数の光

川のせせらぎに調和する虫の囁き

そこには、16年の歳月を掛けて

守り続けられた自然の姿があった。



満ち溢れる 蘇りし光

Revived light.

「ええ写真とれたかいな？」

腰を据えてカメラのシャッターを切り始めてから気付けば1時間以上もの時間が過ぎていた。声を掛けられるまで気付かないほどに私はその景色に夢中になっていたのだ。

2017年5月。私は勝浦町の与川内地区を訪れていた。地元の方に案内してもらい、ホタルが飛び交う川の中へ入っていくとそこには日常とは切り離されたかのような世界が広がっていた。五感全てで感じる自然の心地よさと言えはいいだろうか。

満天の星空を背景に、ほのかに灯るホタル達の光。澄み切った空気と川の香り、贅沢なことに虫達が織り成すBGMまでついている。

「この景色は、一体どうやって保たれているのだろうか？」私はふと、そんなことを疑問に思った。



① ホタルまつりに向けての準備 ② 河川清掃の様子 ③ 案内してくれた神子さん ④ 川の真ん中から見た景色 ⑤ 歩道からホタルを観賞する観光客 ⑥ ホタルまつりの様子 ⑦ 毎年恒例のたこ焼き ⑧ くじ引きの景品

日常とは切り離された世界へ

案内してくれた方へ尋ねてみると、「与川内ホタル村保存会」という団体があるのだと言う。結成されたのは16年前。

今でこそ数万匹のホタルが飛び交うこの場所だが、当時はわずかな数しか飛んでいなかった。そこで、まずはホタルを繁殖することに。加えてホタルのエサとなるカワナという巻貝を川へと放流した。もちろん川の清掃もおこなった。年間通しての地道な活動の甲斐あって、数年後にはホタルが自生し地域へ光が蘇ったという。

私はますますこの与川内という場所とそこに住まう人に興味を持ち、しばらく通い続けてみることにした…。



何度かその場所を訪れてみて感じたことがある。

「今日はようけホタル飛びよるわ」

「こっちは全然おらんけん、あっち行つてみい」

「写真やったらあそこで撮つたらええわ、案内しよか？」

見ず知らずの私に、たくさんの方々が声をかけてくれた。人があたたかい、なんていうと田舎のありがちなイメージになってしまうようなものだが、この地域の景色を誇らしく思っているということ、それを見に来た人を歓迎する心意気を強く感じた。



5月26日、27日の2日間は、ホタルまつりが開催された。期間中に訪れるお客さんはなんと1万人を超えるのだとか。送迎のために用意された道の駅からのシャトルバスがひっきりなしに往来しており、警備には県警も協力している。交通整理や出店には与川内地区の全住民が出ており、文字通り地域一丸となって創り上げられた空間であるように感じた。

これだけの人が溢れているにも関わらず、迎え入れる地域の方々のあたたかさは変わらない。毎年訪れる数多の観光客を魅了するのは、この集落で過ごす時間があるの、癒し、なのではないだろうか。

私はいつのまにか、ホタルに灯された景色以上に、この地域の在り方に心惹かれるようになっていた。

ホタルまつり開催



地域を照らす光、集落の絆

Light of hope.



守り続けてきた、人々の繋がりが



もしこの与川内のホテルまつりに訪れることがあれば、そんな光の裏側に秘められた物語にもぜひ目を向けてみてほしい。
そうすればきっと、あなたの眼前に広がる景色がまた一段と輝いて見えるだろう。

「地方の創生っていうのは、地域が知恵を絞らん限りはええもんはできん。うちはホテルまつりをする事で地域がつになり、皆さんが、与川内地区に住む人が誇りをもつボランティアに参加していただいとる。それがお客さんの癒しになり、地域の元気に繋がればいい。」
私がこの地域に感じた人のあたたかさの根源は、そんな集落の在り方が生み出す人の関係性だったのだと思う。一人一人が地域に思い入れを持ち、家族ぐるみで活動に取り組み守り続けてきたもの。

ホテルの景色を見せたいがために、活動を始めたわけではなかったのだ。集落を守る…それはこの地域に住まう人々の繋がりを守る事。地域に残された資源を活用し、全ての住民が丸となって活動に取り組むことで生まれた結束こそが、地域を照らす光になる。

「このホテルが飛び出る川、坂本川っていうんですけどね、これに沿うようにして歩道がつけられている。これがホテルの観覧席になる。元々は通学道路としてつくったもんですよ、この道のおかげでホテルと身近にお話ができる。そういう環境がうちにはある。」まつり当日
「このホテルが飛び出る川、坂本川っていうんですけどね、これに沿うようにして歩道がつけられている。これがホテルの観覧席になる。元々は通学道路としてつくったもんですよ、この道のおかげでホテルと身近にお話ができる。そういう環境がうちにはある。」まつり当日

には交通規制も行われ、言葉通りホテル観賞のための専属道路になっていた。

「このホテルが飛び出る川、坂本川っていうんですけどね、これに沿うようにして歩道がつけられている。これがホテルの観覧席になる。元々は通学道路としてつくったもんですよ、この道のおかげでホテルと身近にお話ができる。そういう環境がうちにはある。」まつり当日

「与川内ホテル村保存会」は地域の住民全員（約300人）が会員、そこに行政や法人は入っていない。「体どういう仕組みなのだろう」「なぜ立ち上げようと思ったのか」「活動の原動力となっているのは何なのか」「頭に浮かんだ数々の疑問を、保存会の会長である押栗義雄さんへとぶつけた。今年で82歳となる押栗さんは、町議会議員として20年間地域の活性へと従事した経歴をもっている。真先に説明してくれたのが、与川内のホテルが全国で有名になった理由だった。

単純に人が増えればいいというわけではない。その地域で守り継がれてきた伝統や文化、そして暮らしがある。賑わえば賑わうほどに地域住民が疲弊してしまいうことも珍しくはない。だからこそ、私はこの与川内という集落が気になっていた。途絶えかけていたホテルの光を取り戻すということ、毎年何万人もの人を受け入れること、そのための準備を二年中やり続けるということ、決して楽なことではなかったはずだ。しかしこの人達は皆、快く外の人達を受け入れてくれる。準備の作業をする人達もどこか生き生きとしているように思えた。

「地方創生」全国各地でこの言葉を耳にするようになったのはいつ頃からだったのだろうか。
過疎地域における地域を持続させるための取組は、どこも頭を悩ますばかりだ。